

## 目次

## 序説

- 1 章 又七と沖縄の銀行設立
- 2 章 久徴とは誰か
- 3 章 家老島津久徴とは誰か
- 4 章 久徴は又七の息子か
- 5 章 出資者は又七か
- 6 章 結論
- 7 章 小括

## 序説

幕末から明治維新の薩摩藩士族は、激動の時代を駆け抜けた。永吉島津家第 14 代領主島津又七<sup>1)</sup> がそのひとりである。島津又七は、1827 年（文政 10 年<sup>2)</sup>）5 月 18 日に生まれ、1911 年（明治 44 年）9 月に 26 日に没した。[1] 85 歳であった。今回は沖縄銀行頭取の検証である。何故ならば、「沖縄銀行の頭取もつとめているが、銀行が倒産した後、所有地の口永良部島へ移住した」と記載がある。果たして、「明治の初期に沖縄に銀行が設立されたのだろうか」とあるので詳細を検証したい。[2]

## 1 章 又七と沖縄の銀行設立

沖縄の明治初期の銀行を調べると国立銀行がある。沖縄県に国立銀行設立過程は、鹿児島士族を中心に起こった。それが、第 152 国立銀行である[3.4.5.6]。琉球(沖縄)は薩摩藩の統治下にあった。第 152 国立銀行の設立は、明治 5 年の「国立銀行条例」による。薩摩で士族を中心に金融機関設立の動きがあり、明治 12 年に琉球藩から沖縄県になった時、士族の不満の矛先が沖縄へ向けられた。薩摩士族にとって沖縄は新天地となった。又七も、沖縄で一旗揚げを為すに銀行を作った一人と考えることは自然である、それが第 152 国立銀行であるとしたらどうだろうか。（又七の当時の琉球情報掌握については結論で記載する）

第 152 国立銀行略歴は、明治 12 年 10 月出願、明治 13 年資本金確保、明治 13 年 3 月 15 日第 152 国立銀行開業、明治 16 年 1 月 31 日沖縄本店を沖縄支店に改める。その後沖縄から大阪に移転し（明治 22 年 5 月 31 日閉鎖）[24]、明治 34 年解散である [7、23]。

この沖縄第百五十二国立銀行の出資者<sup>3)</sup> は、

松田通信（士族）120 株、

士師孫太夫（士族）97株、  
島津久徴<sup>4)</sup>（士族）90株、  
児玉東一（士族）60株、  
田辺格之丞（士族）60株、  
士師壯八郎（士族）60株、  
以下8名（士族）60株、  
福島巖（士族）60株 その他である。

設立時役員<sup>5)</sup>は、取締役頭取 福島巖<sup>6)</sup>（士族）60株、

取締役 松田通信<sup>7)</sup>（士族）120株、

取締役 児玉東一<sup>8)</sup>（士族）60株、

取締役 村田孫平<sup>9)</sup>（平民）60株、

取締役支配人 徳田作兵衛<sup>10)</sup>（平民）60株である。

第152 国立銀行の出資者と設立時の役員名に、島津又七の名がない。又島津性がひとり、島津久徴とあるが又七と関係があるのか。

## 第2章 久徴とは誰か

島津又七が、沖縄銀行頭取だった記載は確認できないが、存命期間が明治であり、年代として銀行が破綻して再び口永良部へ戻ったとあるので、明治前期に設立された第152 国立銀行で間違いない。

その出資者は薩摩士族が25人、平民が12人であり、出資総額は、1643株、薩摩士族1193株、平民450株で、薩摩士族の中でもベスト3が、307株を持っていた。薩摩士族による薩摩士族の為の銀行である。特に注目すべき人物は、島津久徴である。「大株主の一人で、明治13年10月に取締役になった島津久徴は、薩摩藩主島津斉彬時代に家老を務めた人物であり、いずれも設立に「箔」をつけるのに役立ち、14年以降沖縄県庁の為換方の実現に預かって力があつた」とある。[3] 又「島津久光の公武合体論にもとづく藩体制の改革の際、更迭されて首座家老の席を退いた人物である」[4]と記載されているので、薩摩藩で余程の大物であったことが解る。

ではこの島津久徴とは誰か、そして島津又七と関係があるのか。島津又七は、明治2年まで、家老であったが、島津斉彬時代の家老ではない。[8.9]。また又七には、息子がいる。名前が島津久徴である。息子久徴は、慶応2年に誕生し、大正13年に没した。[10] 明治13年は、14歳であるが、同一人物であろうか。

## 第3章 家老島津久徴とは誰か

そこで薩摩藩主斉彬の時に家老であった島津久徴を調べると、薩摩藩には、斉彬～茂久の時[8.9]に、2人の久徴を確認できた。日置島津家・宗家準二男大蔵家であり、その他3名

知覧家・加治木家・永吉島津家である。島津斉彬の没年は、1858年である。家老の期間を確認すると、

- ① 日置島津家は、1855年－1861年（1870年没）<sup>11)</sup>（家老久徴）島津久風嫡子
- ② 宗家準二男大蔵家は、1861年－1864年（家老久徴）島津久品の子  
-文化四年(1807年)丁卯十一月、嶋津久馬継目養子願之通御免被仰付旨、  
御家老穎娃信濃殿より被仰渡候[11]  
・準二男家島津大蔵家略図[10]  
島津久壽（藤馬）→久陸（久馬）→久品（資全久隆大蔵）→久徴（久昌丹波隼見久馬大蔵）
- ③ 知覧家は、1826年－1880年（没年）、（久徴）
- ④ 加治木は、1752年－1809年（没年）（久徴）第6代当主
- ⑤ 永吉島津家は、1866年－1924年没（久徴）

そこで、①日置島津久徴は、維新後直に死亡した。③知覧家島津久徴は、明治13年死亡した。④加治木島津久徴は、文化6年に死亡しているので、1858年斉彬没年から1879年第152国立銀行出資年迄の該当者は、②準二男大蔵家と⑤永吉島津家である。しかし、準二男家久徴の場合は、家老期間が斉彬時代ではなく茂久(忠義)の時である。また没年が確認できない[9]。そして永吉島津家久徴の場合は、斉彬時代に家老ではなく誕生(慶応2年)した。明治12年は13歳である。

沖縄県立図書館にメール<sup>12)</sup>にて、「出資者島津久徴が、当時何処に住んでいたか」問い合わせた結果、回答が「島津久徴 士 鹿児島県鹿児島郡西田村薬師町 設立時の所有株数 30 13年2月増資時の引受株数 60」と回答を頂いた。又『「沖縄第152国立銀行の史的研究」[4]でも確認できた。処で、準二男家島津久徴の住所は、『鹿児島城下絵図散歩』によると「番号 1890 安政6年の住人 島津隼見 9反7畝26歩 天保13年の住人 1町9反7畝2歩 現在の建造物等一部は甲南通り上 現在の住居表示 上之園町 24番の東 地図番号 30」とある。[12]出資者久徴の住所と準二男大蔵家の住所が一致しない。

### 第3章 久徴は又七の息子か

では島津又七の住居は、鹿児島の何処だったのか。[9]より天保13年に「薬師1丁目7、8番 土地 2400坪」を島津中務が所有している。その後、安政6年には島津主殿（又七）の所有である。[12]その後が解らないので法務局で調べると、明治29年12月23日迄島津久徴の所有であったことが登記[13]で確認できた。整理すると、島津中務とは第12代永吉島津家領主島津中務久陽であり、第13代領主島津久敬は、今和泉島津家篤姫の兄で永吉家に養子に來たが、嘉永7年に、養母と密通を犯し、翌年正月職を辞し、所領の永吉で終身幽閉、養母も実家・今和泉での謹慎処分となる<sup>13)</sup>。久敬の後を永吉島津分家から久壽（又七）が養子なり家督相続することになった。[14]久壽（又七）が第14代領主島津久壽（又七）

である。

久壽（又七）が、養子に行ったのは安政2年で、7年には土地を所有している。[12] 薩英戦争の「6月23日新上橋には島津主殿(久壽)長男又七郎(十二歳)百余人を率いて陣し」とある[15]ので、ここに「陣した」のは、又七の自宅が、地理的に非常に近い距離であったと推測する、又長男又七郎は早死である。島津久徴が家督相続したのが、明治11年で、明治29年に、薬師の自宅の所有者が変わっているのが確認できた[12]。結果銀行出資者の島津久徴の住所と、島津久壽（又七）の息子島津久徴の住所が同一であった<sup>14)</sup>ので、出資者久徴は又七の子息であろう。息子久徴が、口永良部に移住したのが明治33年である[2]ので、薬師の自宅を売却してから移住したと考えられる。

しかし明治12年、13歳の久徴は大金を所持していたのか。又出資者等なれたであろうか、偶然か、銀行が本店を大阪に移し解散したのが、明治34年であり、久徴が鹿児島から口永良部へ移住したのが、明治33年である。ならば実質的には「銀行倒産後に口永良部へ移住した」[1]記載は合っているが、「所有地の口永良部島へ移住した」[1]とあるが、当時土地を所有していたかは疑問である。何故なら家臣の移住者の子孫の居住地の所有者を法務局の登記簿[13]で確認すると別人であった<sup>15)</sup>。「払い下げて引っ越した」[20]と言われているが、どういうことだろうか。

#### 第4章 出資者は又七か

島津又七は、資金を持っていたのか。島津又七は永吉島津家領主で、4400石（一所持）<sup>16)</sup>であった、薩摩藩は、全国どこの藩よりも士族が多く、「明治4年7月で、772,354に対して、士族は203,711で26.35%であるが、明治6年0.56%になった。」[18]又、「籾高で77万石、米高にすると37万石であり、総人口の4分の1（全国の5倍）で、財政面で厳しく麓の武士は郷士として平時は農耕によって生計を立てていた」[17]とある。

藩士一人当たりの知行高の全国平均は、9.55石であるのに対して、薩摩藩は2.92石である。長岡藩は8.55石。年貢率薩摩藩は、36.1%で、長岡藩は43.8%どちらもやや同じであるので、薩摩藩の藩士給料は3分の1に抑えて藩士数を3倍に増やしていたと言える[18]。薩摩藩士は裕福ではなかった。明治2年2月改正で薩摩藩の体制は革命的に180度転換した。西郷隆盛と桂久武を中心に鹿児島体制が出来、明治維新前の門閥体制の完全な崩壊・解体である<sup>17)</sup>。薩摩藩家老島津久壽（又七）もその1人である。

という事は、家老の永吉島津家領主（一所持）又七は、4,400石で、（1石=100升）、明治2年戊辰の功労者恩賞が、明治4年に扶録改訂で1500石を受けている<sup>18)</sup>。1500石の扶録金が、1石は米150kg、米10kgを5,000円とすると、1石は $5,000 \times 150 \div 10 = 75,000$ 円である。 $1,500 \times 75,000 = 1$ 億1,250万円になる[25]。その他に、一所持（例平佐北郷氏）

は、明治2年8月、世録300石、蔵米200石、別に15ヶ年に限り堪忍料200石 合計700石を頂戴した<sup>19)</sup>。[16]700×75,000=5,250万円である。又七も例外ではない。

明治以前は、地行所から俸禄を貰い、明治2年の廃藩置県以降は、米穀支給になった。そして明治5年 地租改正で、金納化された。金禄高1000円以上(220石)、利子5% 支給5年から7年6か月分 1人当たりの平均額60,528円 1人当たりの利子受取額3,026円である[19]。「明治6年家禄賞典禄を奉還した士族に事業資金として与えられたのが秩禄公債で、秩禄の4~5年分を現金と公債半々で支給された。士族一人平均550円である。当時の米価一石当たり5~6円であったから、相当な金額といわなければならない」[29]。新政府の参議(大久保利通)の給料が500円であった。

第152 国立銀行設立時の大株主の島津久徴は、90株で、4,500円を出資した。換算すると約1億の出資である。出資金と扶録金が、ほぼ同額である。さらには、島津又七は、下記の事業を興している。「口永良部島ポータルサイト」<sup>20)</sup>の『安山：島の歴史(3)』と『屋久高：報告』、『鹿児島県史 第4巻』、『鹿児島県畜産史、中巻』大正2年刊』によると、明治4年 「硫黄鉱山」事業を始め、明治20年頃迄「硫黄鉱山」解散する。明治16年「牧羊社」設立して、明治22年「牧羊社」解散する。大正13年島津久徴は口永良部から引揚げた。[26、27]

因みに、息子久徴への家督相続は、1878年(明治11年)である。明治12年に銀行出資をし、明治29年に自宅売却し、「明治22年に鹿児島島の潮見町で営業継続、明治23年に閉鎖とある。本店を東京に移し明治21年営業停止、明治29年紙幣消却終了。明治30年には普通銀行に転換、明治34年に解散するも当時の銀行預金残高は28,000円」[19]であった。そして、明治33年口永良部へ移住した。

## 第5章 結論

永吉島津家領主又七は、実の父(斉彬家老島津登(久包))の時、琉球在藩奉行をやっている[30]。又義理の兄名越左源太は遠島中に、大島や琉球に精通した見識家であった[31]。日置島津家も大島や琉球事情に焚けた「軍役総奉行」の職に就いている[9]。だから離島の情報を持っていた。詳細を知っていたという事は、薩摩藩の密貿易にも十分に精通していたということで、密貿易の船舶事情に精通し、情報を持っていた又七が、門閥に敗れ新天地を求め、いち早く商業活動に商才を振るったことが推測される。政府の士族に対する授産事業も興っている。沖縄第一百五十二銀行もそんな士族の商業の受け皿であり、領主島津又七が出資をし、名義を島津久徴にしたが、経営は順調ではなく、薩摩士族の為の銀行であったが故にうまくいかなかった。又七は、家督を早々に譲って事業を手掛けるも失敗、自宅を売却せざるを得なかったのか、自宅を売却したのは口永良部に移住する為であったのか。明確ではないが、時期として銀行解散と自宅処分が一致するのが確認できる。しかし、疑問が残る明

治 13 年、又七は 54 歳で、久徴 14 歳で、又七には子供が 8 人、長男又七郎は早死であり、久徴がその後 5 番目で男子であった。53 歳の又七は元気であった、85 歳の生涯を送っている。[22]

今後の課題として、

- ① 明治 12 年、又七 53 歳、息子 13 歳、長男御生存であれば 28 歳であるが、御家族の系図の詳細調査必要。
- ② 何故又七親子(事情は異なる)は、孤島の口永良部に移住したのだろうか。
- ③ 第 152 国立銀行の歴代頭取は誰か。
- ④ 第 12 代領主島津久陽は安政 7 年に何処にいたか、確認が必要。
- ⑤ 第 12、13、14 代の領主継承時の考察が必要。

## 第 6 章 小括

島津又七は、人脈に対して並外れたものは無かったが、無難に役職を熟す堅実家であった。特に敵味方と区別することも無く、その時々を上手に生きた。「幕末に於ける島津分家の政治動向」によると、安政 5 年（又七 35 歳）、家中の若手家臣が騒動を起こした。「鹿児島城内山吹の間楽書事件」である[14]。「川上主膳と川上源十郎が呼び出される。この他に桂小吉郎、島津掃門、北郷作左衛門も参加していた。5 名の吟味は 1 か月におよび、6 月 27 日に彼らは「勘方差控」となった。それから半年後の 12 月 11 日、彼らは逼塞することになる。逼塞決定後、病のため出勤せず役を辞す旨を伝えていた永吉島津家の島津久壽（又七）が、「快気」したため復帰している。実は 5 名に加えて久壽（又七）も加担していたため出勤していなかったのであるが、他の者が穏便な処分であったため復帰した」と記載がある。面白い男である。実に狡猾な知恵者であろうか、密貿易の拠点であった口永良部島へ移住して金儲けを試みるのも理解できる。青年又七のその後の生き様を垣間見る事ができる。もう少し深部に迫らなければ本当の薩摩藩領主の明治維新は理解できない様である。

注)

1. 島津又七は、八郎・権五郎・久壽・久壽・久寿・久壽・主殿・主膳・又七とあるので最後の名又七で統一するが、引用箇所原文通り使用する。
2. 松尾千歳 『維新大人名辞典』と『鹿児島第百科事典』によると文政 8 年である。
3. 参考文献[3、4]より参照
4. 久徴（ひさあきら）（きゅうちょう）（ひさちょう）読み方は特定しない。
5. 参考文献[3、4、5、21]より参照
6. 福島巖 出資者住所「鹿児島県鹿児島市上荒田村」  
「当県左来官員入県後出頭致居 5 日開戦後未出頭人名」西南戦役軍団本営 明治 10 年 名簿に名アリ第三課。
7. 松田通信(副頭取 事業家、銀行業務閑散すぎて仲毛・大瀬の埋立に手出、屠獣業独占)

- 8.児玉東一（資本金2万円で営業申請するも県庁から届出難と回答）
- 9.村田孫平（養蚕・製茶業拡大の為開墾を申請するが却下される）
- 10.徳田作兵衛（県砂糖審査委員筆頭）
- 11.（ ）は、最終年の役職又は没年である
- 12.沖縄県立図書館司書にて回答内容  
 沖縄県立図書館資料班大森 「第百五十二国立銀行出資者の島津久徴とは誰か」 回答
  - ・『沖縄県史 第11巻 資料編1 上杉県令関係日誌』（琉球政府/編 国書刊行会 1989.10）
  - 『沖縄歴史研究』で紹介されている日誌は確認できますが、誓詞は掲載なし。
  - ・『香川大学経済論叢 36(5)』（香川大学経済研究所、2012.3）★当館所蔵なし
  - P618-643 「沖縄第百五十二国立銀行の史的研究 伊丹正博」の中で、
  - P79-81 「設立初期の株主所有株数表」（日高家文書）があり、その中に以下の通り確認できる。
  - 「島津久徴 士 鹿児島県鹿児島郡西田村薬師町 創立時の所有株数 3013年2月増資時の引受株数 60」
13. 参考文献[14]より
- 14.鹿児島城下絵図散歩にて確認できる。
- 15.又七と一緒に島に移住した人の子孫の登記簿で確認する。
- 16.薩摩藩家臣団の家格の事で、御一門、一所持、一所持格、寄合、寄合並の上士層で家老を出ることができる。
- 17.薩摩の門閥争いは、尊王攘夷派と開国派の争いに加え、藩内の家老を中心にした主導権争いもある。島津斉彬前後と島津忠教(久光)の動きと小松帯刀を中心として西郷隆盛・大久保利通が活躍した後勢いづいた戊辰の勝組達である。
- 18.参考文献[22]より引用
- 19.参考文献[28]より引用
- 20.参考文献[20]より引用

#### 参考文献

- 1.国立公文書館.『大正四年贈位事蹟調書島津又七』  
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M0000000000000818224>
- 2.山下正盛.『永吉村郷土史』.平成17年3月出版. ページ: P36-39.
- 3.牧野謙吉.『沖縄第百五十二国立銀行の変遷』. 出版地不明: 中央相互銀行企画課長, 19年11月.
- 4.伊丹正博.『沖縄第百五十二国立銀行の史的研究:明治前期における一地方国立銀行の分析』. 香川大学経済論叢 36巻5号. 出版地不明: 香川大学, 1963年(昭和38年10月31日). ページ: P74-99.

- 5.喜舎場勤子.『沖縄県の幼稚園創設期における気運醸成に関する一考察』沖縄キリスト教短期大学 2001.12.20
6. 金岡克文.『戦前の沖縄県における地域銀行体制の変遷』.高岡法科大学紀要.第 31 号 (Mar. 2020) ページ:P100-102
7. 阿部隆.『大阪における国立銀行の設立と特質』. 出版地不明：現代社会文化研研究 No.45, 2009 年 7 月. ページ: P72.
8. 鹿児島県.『鹿児島県史 別巻.』 鹿児島県. 昭和 16 年 9 月 20 日. ページ: P15、P45
9. 林 匡.『薩摩藩家老の系譜』. 黎明館調査研究報告書 第 27 集, 2015. ページ: P13 表 2
10. 野田幸敬.『島津家家臣団系図集』.: 南方社, 2019 年 6 月 1 日.
- 11.『都城島津家本藩御士族 [本藩御士族略系譜]』(都城島津家史料 ID1591)
12. 塩満郁夫・友野春久『鹿児島城下絵図散歩』. P146-149
13. 法務局.『島津久徴登記簿』. 屋久島法務局.『土地台帳・登記簿』
- 14.岩川拓夫『幕末期における島津分家の政治動向』平成二十八年
- 15.鹿児島県.『薩藩海軍史 中巻.』 P546
16. 原口虎雄.『鹿児島県の歴史』<族籍別人口表> - 平民対士族の人口比 -
17. 鹿児島県.『鹿児島県 HP.』<薩摩藩の支配体制>.  
<http://www.pref.kagoshima.jp/ab23/pr/gaiyou/rekishi/tyuusei/shihgai.html>.
18. 薩摩藩士.『幕末先夜一夜 HP』. <幕末は藩士 10 人集まれば 1 人が薩摩藩士>  
<http://onjweb.com/netbakumaz/jshoda/essay/essays16.htm>.
- 19.大森徹.『明治初期の財政構造改革・累積債務処理とその影響』. 2001 年 9 月.P126.表 3
- 20.口永良部年寄り組.「口永良部ポータルサイト」  
<http://kuchinoerabu-jima.org/shuraku.html>
- 21.鹿児島銀行.『鹿児島銀行百年史-第百四十七国立銀行時代-』 P121-126
- 22.野田幸敬.『永吉島津家略系図』<参考資料>
- 23.邊英治『エコノミア第 66 号巻第 2 号.国立銀行の再検討』.2015 年 11 月.表 5
- 24.官報 第 1788 号<告示> 明治 22 年 6 月 17 日 内閣官報局
- 25.「江戸時代の一両は今のいくら? - 昔のお金の現在価値 - 」日本銀行金融研究所博物館  
<https://www.imes.boj.or.jp/cm/history/historyfaq/mod/1ryou.pdf>
- 26.安山登『口永良部歴史の鍵』県立図書館所蔵
- 27.吹上町『吹上郷土史 中』昭和 44 年 2 月 25 日 P283
- 28.日吉町.『日吉町郷土史 下巻』 P7-8
- 29.鹿児島市.『鹿児島市史 第五編 明治前期の鹿児島』.P615-616
- 30.鹿児島県.『鹿児島県史 第三巻 <第二章幕末の対外関係>』 P133
- 31.名越左源太『南島雑話』奄美市立奄美博物館所蔵